

市民的公共性を育てる社会科授業づくり

所属校：新宿区立西新宿小学校
氏名：小笠原 めぐみ
派遣先：埼玉大学大学院

キーワード：市民的公共性 地域 対話 価値追究

I 研究の目的

教師として日頃の社会科の授業実践を行う中から次のような二つの問いが生まれた。一つは、子ども達にとって社会的事象のつながりやそのしくみを「理解する」と「公民的資質の基礎を養う」ことをつなげるためにはどのような学習が必要なのだろうかという問いである。もう一つは、現代社会の中で現れている若者や子どもを取り巻く様々な問題から、これからの社会の形成者として子どもたちに育てなければならぬ資質とはどのようなものなのかという問いである。改正後の教育基本法の「教育の目標」の中の一文から筆者は特に「公共の精神」という言葉に着目し、その言葉の後に続く「主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度」を基底する公共の精神とはいかなるものかを明らかにしたいと考えた。

そこで、本研究では、現代社会に求められる公共性とはどのようなものであり、その育成の為にはいかなる社会科の授業を創っていけば良いかを考えていきたい。

よって、本研究の目的は、まず、これからの社会において求められる公共性とはどのようなものであるかを明らかにし、小学校社会科における児童の公共性の育成にとって有効な授業の在り方について授業実践を通してその有効性を検証することである。

II 研究の方法

本研究の方法は、以下の①から④の段階を経て行う。

①現代社会における青少年の問題と社会科教育の問題を考察し、現代の子どもたちに必要な力と、今日求められている新しい公共性との関連を示す。

②佐藤学氏が展開する「学びの共同体」の形成の在り方に着目し、文献の講読を通して、これからの学校教育において対話することと市民的公共性の育成とのつながりを明らかにする。

③①と②での検討に基づいて、市民的公共性の育成に有効な小学校社会科の授業構想について「学習題材」と「学習方法」と「学習過程」の3つの視点から理論づける。

④③の理論に基づき、市民的公共性の育成に有効な社会科授業の具体的な単元の開発と実践授業による検証を行う。

III 研究の結果

(1) 青少年を取り巻く課題からみた市民的公共性の必要性

第一章では青少年の諸課題を現代社会における課題とこれまでの社会科教育における課題の二つの視点から検討した。そしてそのことからこれから子ども達に育てていきたい資質としての市民的公共性を定義した。

青少年を取り巻く諸課題の実情の明確化とその要因の検討から、筆者は、子ども達にとって、自らの身近な空間とそれを形成する他者との関係性を市場原理を脱却したところで体感すること、そしてその社会との相対化を通して自己を形成することが求められていると考えた。また、教師の課題として子どもが学校で学ぶ「社会」と自らが形成者となっていく「社会」とが合致するよう「社会の問題や課題」の内容と共有化の方法の検討、共有化の空間の創造が課題であると考えた。

これらに加えて、現代は変化の激しい社会である。これからの社会に求められているのは、よりよい社会を自分たちで創造していこうとする意欲と実践力（下線筆者）であると考え。そしてこの意欲や実践力の基盤となる精神が公共の精神であり、子どもや大人の別なく社会の形成者一人ひとりに涵養される必要のあるものだと筆者は考える。そして、より重要なのは上記下線部のような意欲と実践力が国家権力によって規定されるものではなくその目的や動機が明確化されることと手段や過程が吟味されることを通して個人の中で志向されることが必要であると考え。

これらのことから筆者は社会科教育を通して子どもたちに育てたい資質を以下のように捉え、本論で述べていく「市民的公共性」と定義した。

自分と他者との多様な関係性の体感を通し共有化された「みんなにとってよい」という価値観に基づき、社会を創造していこうとする志向性

(2) 市民的公共性の育成を目指した小学校社会科の授業構想

第二章では、小学校段階での市民的公共性の育成を目指した社会科授業についてその構想を「学習題材」と「学習過程」と「学習方法」の3つの視点で理論づける。

市民的公共性の育成を図るためには、学級を市民的公共性の育成の為に空間として成立させる必要があると考えた。そこで、佐藤学氏が述べている「学びの共同体」の形成の理論を手がかりに、「対話」による授業構成を考えた。よって、「学習方法」としては自分や教師や友達だけでなく様々な立場の方々との「対話」をキーワードとして構想した。また、「みんなにとって良い」という価値観の追究を個人内の価値追究の段階と市民的見地に立った価値追究の段階で組み立てる「学習過程」を取り入れた。さらに、市民的見地にたって価値を追究していけるために「学習題材」として地域の課題を取り上げた。これらのことを鑑みて筆者が勤務する小学校での第5学年の社会科学習の小単元の開発と実践を行うこととした。

(3) 検証授業：小単元「自然災害とわたしたちのくらし」(小学校5年生)

平成22年10月に検証授業を行った。東京新都心に位置する小学校の第5学年の児童35名に次のような問いをもって授業を進めた。問いは、「もし大地震が発生し、近隣に多数の帰宅困難者や滞留者が出てさらに多数の負傷者が救護医療所である自分達の学校に運ばれてきたら、限られた条件の中でそれらの人達を受け入れるのか。」というものである。自分達だけの考えではなく、この問題についてさまざまな立場の人から話を聞き、さらに意見を交換する場を設定することで「みんなにとって良い」という価値観の形成を図った。

IV 考察

(1) 成果

次の四点を研究の成果として挙げる。第一点はこれからの社会に求められる公共性を「市民的公共性」と位置づけその必要性について青少年を取り巻く諸課題から明らかにした点である。第二点は、これからの社会科教育の在り方について、「価値追究のプロセス」を取り入れた学習過程の構想を提示した点である。第三点は、「地域の課題」を学習題材とし、「対話」を学習方法とし、「価値的探求」を重視した学習過程を取り入れた授業の構想の有効性である。第四点として、検証授業を

通して学校を核とした「学びの共同体」の拡がりが見られた点である。

(2) 課題

課題については次の二点である。一つは、「価値的探究のプロセス」を学習過程とした社会科の授業における市民的公共性以外の育てるべき力の育成の在り方である。二つ目は「立場の違う人の考え方」との出会い方を単元の中でどのように構成していくのが有効なのかということである。そして価値を追究していく問題については対話の為に必要になる要素の理解が発達段階に合致したものであるか検討しなければならないということが課題として明らかになった。

主な参考文献一覧

<公共性>

・ユルゲン・ハーバーマス、『コミュニケーション的行為の理論 {下}』、未来社、1987年

『公共性構造転換=第2版=』、未来社、1994年

<子どもをめぐる問題・子ども論について>

・内田樹『下流志向一学ばない子どもたち働かない若者たち』講談社、2007年

・門脇厚司 宮台真司『「異界」を生きる少年少女』東洋館出版社、1995年

・門脇厚司『子どもの社会力』岩波書店、1999年

・高橋勝『情報・消費社会と子ども』(子ども観改革シリーズNO. 1) 明治図書、2006年

『文化変容のなかの子ども一経験・他者・関係性』東信堂、2002年

・土井隆義『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房、2008年

<教育及び学校教育についての諸問題について>

・OECD 教育研究改革センター・NPO 教育テスト研究センター『学習の社会的成果―健康、市民、社会的関与と社会関係』明石書店、2008年

・佐伯胖『「わかる」ということの意味』岩波書店、1994年

・佐藤学『カリキュラムの批評―公共性の再構築へ』世織書房、1996年

『教育改革をデザインする』岩波書店、1999年

<統計資料>

・電通総研・日本リサーチセンター『世界主要国価値観データブック』同友館、2008年